

# 私立大学研究ブランディング事業

## 2019（令和元）年度の進捗状況

学校法人番号	131097	学校法人名	立正大学学園		
大学名	立正大学				
事業名	立正大学学術交流プロジェクト				
申請タイプ	タイプB	支援期間	3年	収容定員	9840人
参画組織	立正大学ウズベキスタン学術調査隊、仏教学部、文学部、地球環境科学部、法華経文化研究所、研究推進・地域連携センター				
事業概要	<p>本事業は、本学の特色を生かした学際的領域の研究事業である。ウズベキスタン研究機関との学術協定に基づき、現地研究者と共同で当地に残る古代仏教遺跡の発掘、保存修復、科学分析を行い、日本への仏教展開過程を明らかにする。そして2015年に発表した共同声明の内容を深化すべく、当地での発見を内外に公表し、研究事業への展開や教育交流など、学術・教育両面での成果を還元することを目指す。</p>				
①事業目的	<p>本事業は、ウズベキスタン共和国科学アカデミー等との協定に基づき、現地研究者と共同で当地に残る古代仏教伽藍址の発掘、保存修復、出土物の整理調査および科学的分析を行い、ユーラシア大陸における仏教文化の展開過程の一端を明らかにすることを主目的としている。また立正大学は日蓮宗の僧侶の教育機関を淵源としており、日蓮の社会貢献への誓いを現代的に言い換えた「正しきを立てて、安穏な社会、平和な世界に寄与しよう」という立正精神を「建学の精神」としている。しかし、現状では本学の独自性や建学の精神について広く認知されているとは言い難く、今後一層の努力と貢献が求められている。そこで、「仏教学・歴史学・考古学・地理学」という創設以来の学問領域に端緒となる課題を置きつつ、8学部15学科からなる総合大学として広く研究者の参画を求めやすく、かつ我が国の研究者にとって未解明な領域を多く含む課題を設定することで、本学の独自性と建学の精神を活かした貢献ができると考えた。ウズベキスタンは旧ソ連の経済圏に属し、かつイスラーム教を国教としているという点では日本の現代社会のあり方とは距離がある一方で、親日国であることから、今後の相互交流や研究によって得られる人脈や知識には双方に新たな可能性を期待できる。</p> <p>【自大学及び外部環境並びに社会情勢等に係る現状・課題の分析内容と研究テーマとの関連】</p> <p>① 仏教への世界的な再注目  ② ユーラシア研究の重要性  ③ 仏教遺跡に関する学術的意義</p> <p>【大学のブランド(独自色)として打ち出すための研究テーマとしての選択理由】</p> <p>① 世界的な仏教文化遺産の調査・研究を行う機関のひとつとして  ② ウズベキスタンの人材育成や調査修復技術の教育に貢献可能な教育機関として  ③ すでに実績のある事業を持続的に発展拡大させ、国際貢献する契機として</p> <p>【大学の将来ビジョン】</p> <p>本学の建学の精神は「正しきを立てて、安穏な社会、平和な世界に寄与」することにある。本学の蓄積ある学問を誠実に深めていくことで、我が国の文化や世界のなりたちの一端を解き明かし、世界の人々が希求する平和かつ文化的な交流に貢献する総合大学というイメージを定着させたい。その点ではとくに「人間・社会・地球」という研究分野をカバーする総合大学としての本学のイメージを訴求していきたい。</p>				

<p>②2019（令和元）年度の実施目標及び実施計画</p>	<p>■実施目標 事業総括に向けた取り組みとズルマラ仏塔の保存・修復のための必要な発掘調査を継続して行う。また仏塔保存のための恒久的措置の実施（を行う）。出土遺物紹介のための展覧会と日・ウズベキスタン両国研究者によるシンポジウムの開催 このうち、「日・ウズベキスタン両国研究者によるシンポジウムの開催」は平成30年度に前倒して達成済みである。令和元年度にはこれに関する発表資料をまとめた報告集の刊行を予定した。また、平成30年度までの未完の作業であった「未着手未完の実測図の継続作成（カラ・テベ）」「保存のための恒久的処置を科学アカデミーと協議」「出土遺物及び実測図面、写真等の整理作業（カラ・テベ）」「成果報告書作成・公刊作業（カラ・テベ）」の4点を、令和元年度中の達成目標として含めた。「出土遺物紹介のための展覧会企画準備」については、パネル展示などによる実現を目標とした。また平成30年度と同様に在ウズベキスタン共和国日本国大使館と協力しながら、ウズベキスタンに在住する日本人および日本語を学ぶウズベキスタンの学生向けの講演会を開催し、令和元年度中にはその内容をまとめた刊行物（ウズベク語による）を公刊することを予定した。</p> <p>■実施計画 ①ズルマラ仏塔の保存・修復のための必要な発掘調査 ②仏塔保存のための恒久的措置の（原案作成） ③未着手未完の実測図の継続作成（カラ・テベ） ④保存のための恒久的処置を科学アカデミーと協議（カラ・テベ） ⑤出土遺物及び実測図面、写真等の整理作業（カラ・テベ） ⑥成果報告書作成・公刊作業（カラ・テベ） ⑦出土遺物紹介のための展覧会企画準備 ⑧ウズベキスタンにおける（本学研究者による）講演会開催、その資料による書籍の刊行 ⑨日・ウズベキスタン両国研究者によるシンポジウム報告集の刊行 ⑩（ニュースレターの刊行） ⑪（新聞・Webなどの媒体を利用した学内外の広報活動） ※⑧の講演会については2018年度に前倒して実施済みである。</p>
<p>③2019（令和元）年度の事業成果</p>	<p>予定されていた上記の活動①～⑪のうち、COVID-19の世界的流行によって活動を中断せざるをえなかった②および⑦、そして先方のスムーズな協力が得られなかった④を除く全ての項目において目的をほぼ達成した。②についても共和国文化省との間で遺跡保存に向け進展がみられた。これまでの活動を、「カラ・テベ テルメズの仏教遺跡」、「シルクロードの歴史・考古・美術－立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクト公開講演会 講演録－」、「日本の大学への招待－日本の言葉や文化に関心を持つ人へ」の3冊の書籍に集約して、到達点を示すことができた。</p>
<p>④2019（令和元）年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</p>	<p>（自己点検・評価） 「立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクト」においては、当初目的をほぼ達成し、今後の大学ブランディング事業展開の上で重要な礎を築くことが出来た。主眼となっていたウズベキスタン・日本両国の研究者の交流とその研究成果の還元においても十分な成果をおさめた。</p> <p>（外部評価） 本ブランディング事業の3年を含めて5年に渡る発掘・調査・講演を刊行物にまとめたのみならず、新たな関連遺跡の調査保存の活動を展開中であり、研究・調査と学術交流の点で大いに評価できる。今後ウズベキスタン本国の研究者と連携し、さらなる研究の発展が望まれる。 ブランディングという観点からみても、積極的な活動が展開され、学外へのアピールは一定程度達成されたと思われる。</p>
<p>⑤2019（令和元）年度の補助金の使用状況</p>	<p>研究費は主として、ズルマラ仏塔の発掘調査およびこれまでの活動を総合した複数の刊行物発行に使用された。仏塔調査では、仏塔周辺の遺跡の探索を目的として、調査を継続すると同時に、遺跡保存にも着手した。以上を踏まえた上で、補助金の使用状況については、外部評価委員4名より、適正との評価を受けた。尚、総事業経費21,069,296円のうち、現地活動費用は7,357,743円、刊行物発行は6,931,573円であった。</p>